

資料

100年史関連論考

## 農村セトルメント運動の展開 —自由学園・全国友の会・婦人之友一体となって—

遠藤邦子

(自由学園図書館・資料室)

原稿受付 2020年11月22日；原稿受理 2021年2月26日

### Development of the Settlements for Rural Communities with Jiyu Gakuen, Zenkokutomonokai and Fujinnotomo

Kuniko ENDO

*Jiyu Gakuen Library and Archives*

本稿は、自由学園が「婦人之友」「全国友の会」と一体となって行った社会活動のうち、農村への運動について述べる。

この運動は、自由学園南沢キャンパスの地元・当時は純農村であった東京府下久留米村での「自由学園農村セトルメント」に始まり、昭和恐慌以降、「全国友の会」が中心となって『婦人之友』と共催した「東北農村生活合理化運動」「東北セトルメント」に展開し、戦後の「農村文化運動」へと継続した。自由学園・全国友の会・婦人之友社の3団体は、同じ創立者羽仁もと子・吉一夫妻のもとに新しい社会建設の理想を共有し、教育機関、社会活動団体、出版社とそれぞれの特質を活かして、共にこの運動に携わった。特に農村への運動と災害救援の分野では一体となって活動した歴史がある。

学園では戦前期には主として女子部卒業生、戦中から戦後は主として女子部最高学年の生徒・学生が携わり、まさに「学校から社会へ」働きかける、大きな経験となった。

ここでは、当時用いた「セトルメント」の表記を用いる。

なお、本稿は2021年刊行予定の自由学園100年史（書籍版）第III部第3章の詳細版としての位置づけを持っている。

**KeyWords:** 農村、セトルメント、セツルメント、生活合理化、全国友の会、子供服、託児所、診療所

#### 序章. 『婦人之友』『自由学園』『全国友の会』の成立

羽仁もと子・吉一夫妻は、理想とする社会をつくるために、その最小単位である家庭に着目して1903（明治36）年4月『家庭之友』（出版元内外出版協会）を創刊、さらに1908年、『婦人之友』を創刊した。翌1909年には婦人之友社を設立、『家庭之友』の編集を辞して『婦人之友』に専念する態勢となった<sup>1</sup>。

1905年には社内に買物部（購買部）を作り、記事に登場する調理器具や材料などの通信販売を始め、徐々に家具や日用品に範囲を広げて読者の便宜をはかり、また講習会を行うなど、雑誌で紹介する新しい生活の実現に向けて読者との親しい交流が行うようになった。

1914（大正3）年『子供之友』、翌年『新少女』と続けて子ども向けの雑誌を創刊、1916年社屋に隣接して運動場を整備し、読者を集めた「読者大運動会」を開催した<sup>2</sup>ことが、「自由学園」創立のひとつの背景となった。2年目に

は競技に参加した少年少女933人、家族などの観覧者約8000人による運動会が、規律と品位をもって秩序正しく開催されたと報告されている<sup>3</sup>。5年間、年1回の運動会が続けられたが、その運動場にフランク・ロイド・ライト設計による校舎（現明日館）が建設されて、1921年4月「自由学園」が創立した。

一方、婦人たちのために1918年に婦人之友社構内で始めた「婦人手芸展覽即売会」は、手作りの子供服、実用的な室内装飾品などを出品できる会で、売る側にも買う側にも家庭にも有意義な催しであり、『婦人之友』読者の親睦を深める催しであったが、同時にもと子の女性の職業問題に対する提案の実現の場でもあった。

もと子は1919年には「主婦の会」の設立を提案し<sup>4</sup>、女学校同窓連合会にも関わり<sup>5</sup>、一貫して女性たちが家庭だけでなく広く社会に視野を広げて、女性ならではの活動を行うことを訴えている。1923年1月には「婦人之友読者組合」を提案<sup>6</sup>、各地にうまれた会の活動の様子は、婦人之友誌上に報告された。

1927年、『羽仁もと子著作集』刊行が発表された。刊行を前にして記念の講演会、音楽会等が催されるなかで、もと子は読者たちの熱い友情を身近に感じて、「私のお友達に、心から献げる非常に実際のな手紙」として著作集執筆・編集を続けた。同時に規則の多かった従来の「読者組合」を解散して、全国各地に「友の会」の設立をとの呼びかけを行った<sup>7</sup>。同年、松本、岡山、大阪、奈良友の会が成立<sup>8</sup>、その後も各地に友の会成立が相次いだ。全国組織としての「全国友の会」が、東京に中央部を置いて結成されるのは1930年11月である。

## 1. 自由学園農村セトルメント

### 1-1. 南沢キャンパス 園芸・運動の場として

自由学園の農村への働きかけの端緒は、1925年、学園が東京府下久留米村に約10万坪の土地を取得したことであった。新しい学校用地2万坪は当面、園芸や運動等の場となり、1926年11月、ここで初めて運動会を開き、後には村人を招待して交流の場にもなった。残る土地は関係者に分譲され学園都市「学園町」を構成しつつあった。1929年4月羽仁夫妻は学園敷地内に自宅を建設して移住、1930年1月女学校の寮（清風寮）、同年4月小学校、1934年9月女学校が目白から南沢へ移転して学校機能がすべて移転した。

当時、自由学園校舎と婦人之友社の住居表示は、東京府高田町雑司ヶ谷上り屋敷であった。しかし、最寄の省線（山手線）の駅名「目白」に由来すると思われるが、当時も今も、関係者はこのキャンパスを目白と呼び慣わしている<sup>9</sup>。一方、東京府北多摩郡久留米村の新しいキャンパスは、広い校地の中の字の一つをとって南沢と呼ばれている。どちらも住居表示とは異なる通称である。

土地取得から校舎移転までの間に、学園は「自由学園農村セトルメント」を開いた。関係者は「学園セトルメント」または「南沢セトルメント」と略して呼ぶことが多かった。

目白と南沢の往来には武蔵野鉄道（現西武池袋線）の、目白校舎にごく近い上り屋敷駅（1929～1945）と田無町駅（1924年開業、1959年ひばりヶ丘に名称変更）が用いられた。目白校舎は1934年、自由学園本体が南沢に移転した後、卒業生の「生活大学」構想による活動の拠点となり、両キャンパス間の人の往来は多かった。

### 1-2. セトルメントを始めるまで

学園では、卒業後も羽仁夫妻の理想に共鳴し、また夫妻から離れがたくて、婦人之友社記者、自由学園女学校小学校教師、南沢学園町分譲に携わるなどで働く者があったが、5回生以降の数年間、回生単位での新たな活動が行われるようになった。

1927年卒業の5回生は、最高学年年次に発表された『羽仁もと子著作集』刊行の宣伝に取組み、講習会、音楽会などを全国で行い、1928年卒業の6回生は、「自由学園消費組合」を始めた。1929年卒業の7回生は「自由学園農村セトルメント」に取組み、1930年卒業の8回生は、「自由学園工芸研究所」を始め、1931年卒業の9回生は、「全国友の会」による「家庭生活合理化展」作成と巡回に携わった。いずれも最高学年次から卒業後に連続する活動であった。

1929年開始の「自由学園農村セトルメント」の経緯は7回生の一人佐藤宣子の『白梅』に詳しい。

1928年春ごろ、最高学年であった7回生は、久留米村に行くように羽仁夫妻に度々言われた。都会生活者の多い自由学園と農村社会である地元が共存していくために何が出来るか、その糸口を見つけてくるようにということだった

のだが、遠くに富士山や浅間山の噴火を望み、足下の野の花に目をひかれながらの遠足気分で、夫妻が期待したような発想が都会育ちの生徒たちに浮かばなかったという。そこで夫妻は二つの講座、東京帝国大学・矢内原忠雄の「社会生活の内面的根拠」続いて杉山元治郎の東北の実例を引いた「農繁期託児所」を用意した。矢内原の講義からは、長い伝統があり郷土愛の強い農村と自由学園が互いに理解しあい、人格の向上のために結合することが必要であることを学び、協調への第一歩としてセトルメントについての指針を与えられた。杉山からは、農村での託児所の必要性和具体的な指導を受け、さらに「地主と小作人の対立」という世界共通の農村問題を教えられた。杉山は前年、婦人之友誌上に農村の婦人問題についての文章を掲載、「知識ある先覚の婦人達は進んで農村に入り婦人の教化に勉むべきである」と問題提起している。同じ文中で、消費組合運動についても評価、期待している<sup>10</sup>。

7回生は1929年4月25日、用意していた絹の式服での目白講堂での式の予定を変更して、働き着のようなセラー服で南沢のクヌギ林を切り開いた会場で卒業式をあげて、代表がセトルメントを始める覚悟を「純農村のただ中に、特色のある自由学園が移って行く為には、相互の理解と融和の為に何等かの具体的な手を打たなくてはならない<sup>11</sup>。」と語った<sup>12</sup>。

セトルメントとは、一般的には宗教家や学生などが都市の貧困地区に設備を設け、宿泊・教育・授産・託児・医療など生活全般を助力する活動をさすが、農村セトルメントについてはあまり例がない。矢内原の講義で学んだほかに、関東大震災救援活動において未広蔵太郎や賀川豊彦との接点があったことも影響したかと思われる。

この当時の久留米村は人口5000人程度、畑作を中心とした純農村で、商品作物の中央市場への運搬に主に使われる武蔵野鉄道が1922年池袋・所沢間で電化していたものの、東京市内への人の往来はほとんどなかったという。

卒業後、7回生は度々村へ足を運び、久留米村尋常小学校校長小山源右衛門から村の現状を聞いて、計画を立てた。「託児所」は目的のひとつではあるが、まずは村人と親しくなるために、若い女性たちと、一緒に学んで友だちになることを活動の中心にした。教材には、洋服中心の自分たちが不慣れな和裁を選んだ。講師は南沢学園町在住の友の会会員（後述）らが務めた。『家庭之友』以来のもと子の主張である洋服を薦めることは次の課題として保留した。

同時に、教場となる「セトルメントの家」建築資金を得るため、美術教師山本鼎の農民美術の会に加わって手織りの技術を学び、作品を制作した<sup>13</sup>。この年11月23・24日に開かれた第7回自由学園美術工芸展覧会は、「工芸」の名を冠する自由学園では初めての展覧会で、「この春〔自由学園を〕卒業した人達が南沢に農村文化運動を起こす、その基金のために、秋の展覧会を利用して、沢山な工芸を売ることを目的の一つとしたのであった<sup>14</sup>。7回生を中心に在生も協力、作品を製作・販売して利益を得、そのうち2000円をセトルメント基金とし、学園敷地北西の角に遠藤新設計によるセトルメントの家を建てる資金などにあてることが出来た。自由学園を挙げての援助は、この後も続く活動の原型となった。

7回生は小学校校長らと相談を重ねるほかに村会議員や女子青年団支部長を招いた説明会を女子部清風寮で行うなど、この準備に卒業後約1年間を要した。

### 1-3. セトルメントは久留米村への引越しそば

1930年3月8日、セトルメント開始を知らせる会を村の小学校で行った。刷物「御いっしょに裁縫を勉強しませう」を配布して、「小学校卒業程度、13才から18才の方、期間は3月18日<sup>15</sup>から4月30日、実費1円、裁縫の材料は不用（反物や縫い直しの必要な着物など、学園関係者からの寄付による）と参加を募った。この会に河井道を来賓として招いた。河井は「都市と農村の娘達互いに手をつなぎ」と題する講演をし、都会の長所を農村に取入れることができるか、農村の長所を都会がもてるようになるか、互いに苦心しなくてはならないとデンマークの例を引きながら、お互いに謙遜な態度での協力が必要なることを話した<sup>16</sup>。河井は、もと子とは共に富士見町教会員の間柄であり、1929年、聖書・国際・園芸を教育の柱とする恵泉女学園を創立、農村問題への理解が深かった。

同月24日には、学園敷地北西の角に建物が完成して、発会式を行う。もと子が「形式的な引越しそばではなく、心からの引越しの御挨拶がしたい、（中略）我々の全体を代表して学園の卒業生が代わる代わる毎日9時から3時まで来る。村を代表して皆さんもここに来る。『さうしてお互いにまことの友情と、まことの人としての生命を養ひ、今の時代の婦人として必要なさまざまな力を、まづ手近な所から勉強し修得して行きましよう』と挨拶。それに対して、

村の女子青年団の幹事が、『羽仁もと子著作集』や『婦人之友』を通じて、その理想や精神に憧れていたその中心勢力が私たちの村に来て下さいました、と喜びを語った<sup>17</sup>。

#### 1-4. 和裁からはじめ洋裁・託児所も

予定より遅れて同月27日、村の娘さん8人が集まって第1期が始まった。和裁を中心にほどこもの、つぎもの、洗濯、仕立てなどを学び、部屋の掃除、『羽仁もと子著作集 若き姉妹によす』を読む、当番が交代で昼食を作る、食卓を囲む、すべてが勉強となった。参加者の希望によって徐々に洋裁、あみもの、習字なども加えられた。校内の畑で採れたトマトを使って自由学園消費組合のためにソースづくりをしたこともあった。

約1ヶ月間行われた第1期のしめくくりとして、4月29日天長節の日に展覧即売会を行なった。単衣49枚、袷9枚を縫い上げた中から40枚を出品し26円25銭を売上げ、参加者一人ひとりの労力に対して単衣20銭、袷30銭の縫賃を渡すことができた<sup>18</sup>。

1期終了後の農繁期の間、セトルメントの家ではセトルメント開始前に杉山元治郎から学んでいた農繁期託児所を実践した。託児所も幼稚園もまだ一般的ではない時代であった。農家の子どもたちは幼い弟妹の世話をするために託児所に来ることは出来ず、集まってきたのはよそ行きの着物を着て来るような余裕のある家庭の子どもが多かったという<sup>19</sup>。子どもたちを、よそ行きの着物から用意した手拭い地の洋服に着替えさせたところ好評で、次の農閑期には子供服や母親たちの洋服の講習に発展した<sup>20</sup>。翌年の春の着物・洋服等即売会では参加者の縫った子供服も出品し、「新入学のお子さんに洋服をお着せ下さい」と薦めることもできた<sup>21</sup>。新入学の子供に活動的で手入れのしやすい洋服をという主張は、続いて始まる東北セトルメントでも運動のとは口ともなった。

自由学園小学校<sup>22</sup>の子供たちが、託児所の子供たちと歌、遊戯等、共にたのしく過ごすこともあり<sup>23</sup>。久留米村の農産物を、目白の自由学園消費組合が購入する契約が成立、小学校の昼食の材料に村の農家から野菜を購入するなどの近所づきあいとなった。

このように始まったセトルメントの活動は、農閑期女子青年部生活学校、農繁期子供生活学校、少年少女生活学校、診療所及び健康相談所、副業指導、家庭訪問（育児・衛生の相談）、農産物の学園消費組合直接取引、映画の会、友愛セール、講演会・講習会・子供会と多岐にわたる<sup>24</sup>。

運営資金と和裁洋裁等のための物品の寄付など学校を挙げての援助があり、南沢に住む学園関係者が和裁の講師を務めるなど、南沢の友の会会員の力が大きく、後述の診療所については、特に南沢の友の会員の尽力が大きかった。

#### 1-5. 長く続き村の役に立った診療所

活動開始から2年、学園セトルメントの家を30坪増築して台所を拡張し、託児の部屋と機織場を新設した。診療所も隣接して新築された。1932年4月27日、村の校長先生、親しい村人、羽仁夫妻、自由学園小学校の児童、卒業生、友の会の代表と共に落成式を行なった。機織場では、自由学園工芸研究所のための羊毛紡ぎやホームスパン、古靴下のマットなどが村の若い女性の副業となり、一緒に来る子供たちのための託児所も設けられた。

増築の費用は、『学園新聞』と「友の会レポート」に「農村セトルメントよりの寄付のお願い」<sup>25</sup>を掲載して、関係者の募金を求めた。もと子も欧米の旅<sup>26</sup>の旅費の残り約1000円を卒業生会を通じて寄付している。

セトルメントの活動の中で戦後まで続いたのは診療所であった。無医村であった久留米村に、診療所を併設することはセトルメントの夢であった。医師小林唯四郎（女子部11回生父）の南沢移住を知った村人の要請によって、増築の前年1931年7月1日、学園町の個人宅で診療所がすでに始められおり<sup>27</sup>、セトルメント増・新築の目的の一つは設備の整った診療所の場をつくることでもあった。内科は医師清水近造（女子部7回生の父）、眼科は日曜日に慶応義塾大学病院眼科医学博士植村操（女子部2回生夫）、校医でもあった慶応義塾大学病院内科医学博士・池口輝雄らが加わっての診療が村人に喜ばれた。

1934年3月、女学校南沢移転のための校舎建設工事が始まり、セトルメントの建物は、建設予定の講堂に隣接しているため移動することになった。校舎と同じく遠藤新の設計で、それまでの校地北西の角から南西の角に移って新築された<sup>28</sup>。（旧セトルメントの家はその後女子部の理科室として1984年まで用いられた）

移転先でのセトルメントの主な活動は診療所に集約されていったようだ。当時、医療設備の乏しかった久留米村のみならず、近郷近在のためになくてはならない医療機関となり、薬代だけでの親切な診療が人々に喜ばれ、後に正式に医療機関の許可を受け、戦後は保険診療も行い<sup>29</sup>、村に貢献した<sup>30</sup>。

広い待合室は、村人たちの憩いと交わりの場ともなったという<sup>31</sup>。機織場が併設され、東北からの国内留学生（後述）にも用いられた以外の記録はなく不明だが、久留米村は養蚕、機織りを産業とする地でもあり、学園セトルメントで織物を教えあったという村人の証言が残されている<sup>32</sup>。

他の活動が修了した理由は記録がなく不明だが、1935年に始まった東北への活動（後述）に集中するためであったかと考えられる<sup>33</sup>。

## 2. 東北農村生活合理化運動

### 2-1. 「全国友の会」成立と社会的活動の拡充

#### 2-1-1. 『羽仁もと子著作集』刊行から「友の会」成立へ

前記南沢セトルメントが始まった同年秋、1930年11月「全国友の会」成立を告げる第1回大会が自由学園講堂で行われた。この婦人団体組織こそが「自由学園農村セトルメント」が、「東北農村生活合理化運動」へと発展していく力となった。

各地に友の会が成立するきっかけとなったのは『羽仁もと子著作集』刊行<sup>34</sup>であった。1927年4月、もと子はその計画を、卒業の時期を迎えた5回生に話して、皆の協力を求めた。5回生は、ちょうど建築中であった講堂が完成するまでの間、卒業式を延期して、喜んで「著作集刊行記念」の講演会、講習会、音楽会等を開催するために全国各地に働いた。在校生も加わって縁故を頼りに台湾にまで渡ったという。同時にもと子の提案で『婦人之友』の「読者組合」組織が発展して、各地に自主的な友の会成立が相次いだ。卒業生は各地友の会に入会し、会未成立の地では友の会をあらたに作った。次々に配本される『著作集』に付された「月報 婦人之友社たより」には友の会成立の情報が順次報告され、1930年11月の「全国友の会」成立へと結集していった。もと子は「子どもたちのしていることを危ぶみ気づかっていた父母たちの大部分は、今は実に有力な後援者になりました。次にわれわれの雑誌『婦人之友』の愛読者が、自由学園及び卒業生の活動に刺激されて日本の各地に『友の会』と称する団体をつくるようになりました。学校と共に『思想しつつ生活しつつ祈りつつ』という標語を用いています。これも学校内の働きが社会に反響してゆく一例だと思います<sup>35</sup>。」とこの間の事情を語っている。

#### 2-1-2. 家庭生活合理化展覧会全国で開催

全国友の会第1回大会において、「友の会の有力会員となるためにわれら一人ひとりまず何をなすべきか」「友の会として社会に向かって何をなすべきか」が議題になり「家庭生活のあり方を展覧会をもって世に訴えることはどうか」との会員桐淵とよの提案がとりあげられて<sup>36</sup>、全国友の会成立の翌年11月には早くも「家庭生活合理化展覧会」を目白の校舎で開催することになった。展覧会では、家庭生活の合理化をテーマに、時間の使い方、労力の問題、持ち物の管理、子供の育て方、家計・買い物、住宅の問題などが取り上げられている。持ち物について、個人の物も家の中の道具も出来るだけ少なくすることが合理的であること、そして不用な品は友愛セールによって、新しいものを買うことが出来ない人たちに廉価でわけることを提案している<sup>37</sup>。

展覧会の準備には学園の新卒業生（9回生）を中心に友の会会員や卒業生が主にあたり、1ヶ月前からは生徒たちも展示のための表書きや模型づくり、街頭宣伝などにあたった<sup>38</sup>。この展覧会は、以後、全国主要都市64カ所を巡回し、友の会の存在が広く認められる契機となった。9回生は開催地に縁故のある在校生とともに各地に出向き、展覧会設営や宣伝にあたった。

## 2-2. 東北農村セトルメント

### 2-2-1. 家庭生活合理化展の農村への展開

家庭生活合理化展には、農村問題と自由学園セトルメントも取り上げられ、その内容は、『婦人之友』1937年1月号にも掲載された<sup>39</sup>。さらに同じ号で、羽仁説子（吉一・もと子長女・女子部2回生）は、昭和恐慌に続く当時の農

村の惨状に視点を広げ「社会全体一つの神の家族であるといふことを主張する私たちにとって、今日農村のために自分たちの出来得る限りの力を出すことは当然の責任である。(中略)手近なところからはじめることが出来、しかも大きい将来を持っている農村セトルメントをこそ、私共女性の仕事として、心から推薦したいと思う。(中略)学園の農村セトルメントは及ばずながら試験台として、今後様々な試みをして行きたいと思っている<sup>40</sup>。」として、各地友の会が、裁縫、料理・栄養、衛生、育児などの若い女性への講習を、小規模にでも始めることを推奨していた。こうして広く読者に向かって、農村の婦人たち、子供たちに焦点をあてて農村問題への関心が喚起されていった。

これより前、昭和恐慌の影響の残る1934年、東北地方を1931年に続いて再び大凶作が襲う。同年12月号の『婦人之友』には、婦人之友社から派遣された田中孝江(女子部12回生)松井三恵子(女子部3回生)による秋田県一寒村のルポルタージュが掲載されて、東北農村の実情が伝えられた<sup>41</sup>。このように、農村のために何かしたいという気運は醸成されていった。

同時期、1933年もと子は婦人之友巻頭言で、「服装平等学校」の提案をしている<sup>42</sup>。女学校に行かない若い女性に、不用な布類を集めて、洗濯、繕い、仕立て直しなどの洋裁の技術を教え、一定の年限の後、新しい布を扱う技能を持った研究生を養成する学校を各地にとの提案である。このころ1931年婦人之友社発行の『洋服裁縫講習録』によって洋裁技術のある人が増加していたことは、この後のセトルメント活動にも活かされていく<sup>43</sup>。洋裁は、衣生活の合理化に重要であるばかりでなく、副業としての意味も持っていた。

### 2-2-2. 農村を知る 盛岡での現地調査

この時期もと子は、他の婦人団体の活動を評価して視野に入れつつ、一方、友の会は何をなすべきかと、東北各地の友の会にも問いかけていた。それに応じて盛岡友の会青年部員で同友の会生活学校指導者であった吉田幾世(女子部10回生)がもと子を訪ねてきた。吉田は農村のために何が出来るかと問われたときに、農村について何も知らないことに気づいて、近隣の凶作農村の実態調査を始めたいと相談をしに来たのであった。もと子の賛成と、全国友の会の援助を得て、吉田は生活学校の生徒とともに、1931年の凶作の折に学校給食を行ったことで縁のある岩手県田山村を村長の許可も得て選び、年末年始2週間にわたり衣服・食事・住宅・衛生・経済について詳細な実態調査を行った。田山村をふくむ近隣六村の詳細な調査は、那須皓農学博士から女性ならではの調査と高く評価され、那須の前書きが付された『田山村の生活』<sup>44</sup>として出版、この年5月の友の会大会において、この活動に携わるすべての人の参考に供された。

### 2-2-3. 「全国友の会」『婦人之友』に支援呼びかけ

田山村の現地調査が進む12月末、もと子はまず東京友の会例会において、凶作に苦しむ東北のために友の会が働きたい、農村の人々が自身の力でその貧しさを克服できるように、まず、新入学児童のために合理的な洋服を着せたいと提案をした<sup>45</sup>。年が明けてもと子は「家族日本をつくりませう 東北の更生をたすけて」と婦人之友2月号巻頭で全国の友の会と読者に向けて、古着・布類と募金を送るようにと呼びかけた。そこでは「衣」を切り口に、新入学児童の服装を整えることから始め、家の中の整理にまで至る展望が示されていた。「うてばひびく」<sup>46</sup>ように古着・布類が全国から集り、整理・消毒を行ってから、裁縫の勉強と内職の材料にと、各地に送り出される準備が整った。子どもに洋服を着せることは、『婦人之友』の前身『家庭之友』以来のもと子の主張であった。

同時に開催地の選定が行われた。2月7日、東北各地の友の会や県との打ち合わせと視察のために2週間ほど現地におもむいた友の会中央部委員芹川嘉久と御牧恵(女子部5回生)からの報告を、那須皓農学博士、杉山元治郎衆議院議員、羽仁夫妻が聞き、今後の東北農村合理化運動5年計画について話し合う会がもたれた<sup>47</sup>。東北の窮状、問題点が共有される一方、東北人は忍耐強く純朴、素直な気分の素質のよい人、よい指導者が必要とされている、どこでも小学校は普及しているなどと、那須、杉山両氏から励ましを受け、新入学児童の服装に着目した計画を吉一が披露している。自由学園女学校の生徒たちも先生らとともに御牧恵を迎えて座談会をひらき、東北の人々の真の幸福は何かと話し合い、もと子の提案への理解を深めていった<sup>48</sup>。

### 2-2-4. 東北6県で東北農村セトルメント始める

1935年3月から、東北6県の各県に1カ所ずつ、岩手県二戸郡田山村、福島県信夫郡鎌田村、秋田県仙北郡生保内村、青森県東郡小湊町、宮城県伊具郡藤尾村、山形県村山郡中村字大蔵に、順次セトルメントを開所した。開催場

所は必要性の高いところにとの方針の下、受け入れ先の地元友の会、県、村などとの調整によって決まった。派遣される指導者が未だ決まらないこの時期に、春休み中の女子部高等科生徒10人が手伝いを申し出て急遽現地に赴き、地元友の会と共に準備にあたった。

セトルメントで働く指導者は友の会中央部から派遣された。自力で運営可能な盛岡友の会以外の5県の指導者が募集され、その条件は、「1. 東北友の会の方と協力して、セトルメントの使命のために、農村婦人と共に仕事をして、その生活の合理化のために精神的にも指導してゆくことに自信のある方 1. なるべく洋裁のお出来になる方 1. すくなくとも3ヶ月はセトルメントに滞在の出来得る方 所属する友の会に話しリーダーの推薦を得て友の会から申し込みのこと」<sup>49</sup>とある。そして指導者となったのは女子部新卒業生を中心に友の会青年部の若き女性たちだった。

#### 2-2-5. 第1期5カ年計画 主婦を対象に

第1期5カ年計画によるセトルメントは、1935年春、新入学児童の母親たちを対象にして始められた。当初1期生に、わが子の小学校入学のための洋服を縫う指導から始める計画であったが時間的制約によって変更し、上着・下着・整理袋までの洋服200揃いを、全国の友の会員に製作を依頼して用意することにした。短時日のうちに不用品更生による子供服240人分が各友の会で仕立あがり、中央部に集めて陳列会をし、各セトルメントに向けて発送された。それらは入学式に間に合うように1期生に配布、代金一組80銭は薪等で支払われた。4月1日の入学式では、サッパリした洋服姿の新入生が注目を浴びたという。

その母親たち1期生は毎日集まって、中央から送られた古着などを材料に洋裁を習うことを中心にした学びを始めた。朝はまず『羽仁もと子著作集 第12巻 子供読本』から「いろはがるた」等を読んで感想を話し合い、当番が交代で指導者と共に身近な食材をもとに新しい調理法で栄養も学びつつ料理をして、皆で昼食の食卓を囲む、片付けや掃除をする、家庭を訪問して住まい方を共に考えるなど、すべてが勉強となった。これらのカリキュラムは、南沢セトルメントで確立した内容と重なる部分が多かった。和服の繕いなど手縫いは上手であった主婦たちは、贈られたミシンもすぐに使いこなせるようになった。洋裁の仕事には1日工賃20銭が支払われた。

7月には、全国の友の会会員が製作した夏服1000人分が、醸金と古着や布地の寄付と共に中央部から各地に送られ、それらは販売会を開いて販売、まわりの子どもにも子供服を広めた。各地友の会の洋服製作は全6回に及び、2200組の子供服が製作された。翌年中には、現地セトルメントの実力がつき、村の需要を満たせるようになって、各地友の会の製作は終了した<sup>50</sup>。

こうして半年後11月には第1期の卒業式を迎え、卒業生はセトルメントの作業部のメンバーとなって副業としての洋裁を続けるようになった。

1937年5月、もと子は友の会の代表と共に、鎌田・生保内・小湊各セトルメントを5日間かけて視察した。中でも生保内村では村長はじめ行政側の人、女子青年団長、主婦会会員、友の会員、講習生らが村の将来のために託児所が必要なことや、入浴の習慣のための浴場の整備、農業の工夫など具体的に話し合った<sup>51</sup>。青森県八戸出身のもと子と地元の人々とは、特に親しく通ずるものがあったという。

第1期5カ年計画は、1年早く1939年4月に目標の5期生が卒業し、卒業生たちが会員となって「農村友の会」を結成、自立した組織となって目標を達成した。

6セトルメントのうち山形県大蔵は1936年<sup>52</sup>、岩手県田山村は1937年<sup>53</sup>に、地元の事情で途中で終了している<sup>54</sup>。

1938年度1年間の活動は、5期生の活動の他に洋裁短期講習会、春秋2回の農繁期子供生活指導所実施、緬羊飼育開始、生保内に於ける共同田畑の播種と初収穫、共同炊事の実行、東北セトルメント卒業生の家族千人に正月の晴着寄贈<sup>55</sup>と範囲を広げている。中でも、副業としての緬羊飼育と共同田畑の経営は、講習生の夫ら村の男性も加わって一家を挙げての活動になっていることが注目される。

第1期の総支出は40,218円58銭、歳入は婦人之友読者、全国友の会会員、自由学園関係者らの醸金によった<sup>56</sup>。歳入について詳しくは後述。

#### 2-2-6. 第2期の活動 「東北農村女子生活講習所」

第2期は、1939年4月、若い女性を対象に「東北農村女子生活講習所」として、小湊、生保内、藤尾、鎌田の各村

に開設した。募集案内には、「人員20名、セトルメント卒業生の女子〔子女〕を優先、期間：昭和14年4月より15年3月、場所：各4セトルメント、資格：尋常小学校卒業以上13才以上17才まで。目的：良き生活が出来、将来の農村家庭の中堅となる事を目指す。農閑期には衣食住の勉強、農繁期には農村の労作を合理的にするため工夫、学科と精神的方面の勉強、指導者は自由学園出身者、費用月30銭、毎日1合の米」とある<sup>57</sup>。この講習生たちは自らが学ぶ傍ら、「農繁期子供生活指導所」〔託児所〕を手伝い<sup>58</sup>、夏休みには講習生だけで、小学生になった子どものために週1回の子供会を開くまでになった<sup>59</sup>。

その後、青森県小湊では理由は不明ながら講習生の人数が7人にまで減り、東京から指導者を派遣する代わりに、講習生が東京に「留学」することになった。1939年11月、小湊からの4人が南沢に到着、ちょうど開かれていた学園の体操会を見学、もと子の出迎えを受けた。期間をずらして藤尾村から13人生保内からは5人と、次々に南沢に「留学」、学びつつ働き、労賃も得ることが出来た。それぞれ約4ヶ月間、南沢友の家<sup>60</sup>に宿泊し、南沢の家庭で家事の手伝いをして洋裁・和裁・家事を学ぶ傍ら、南沢セトルメント診療所の隣にある機織場で工芸研究所の製品のために指導を受け、袋地を織り、東天寮（自由学園男子寮）の食事作りも手伝った<sup>61</sup>。

1940年春の第2回農村女子講習所は、生保内と藤尾で5月、7月、9月の3回、それぞれ1週間ずつの短期で行われた。それ以降は12月「冬の楽しみ暮らし方講習会」、1941年3月には「手縫いの洋裁たのしき生活講習会」<sup>62</sup>など短期の講習会が行われた。

1939年初春、農村の住居に着目した女子部経済グループの卒業研究で、セトルメントのある宮城県藤尾村、秋田県生保内村と南沢の、主婦の生活時間、住宅内の動作線、持ち物に関する調査を行った。指導の今和次郎は、更に農家の1年中の確かな記録をとり「比較生活学」の成長を期待した<sup>63</sup>が、理由は不明だが後は続いていない。

#### 2-2-7. 農繁期託児所開設 幼児教育展の知見をいかして

1938年6月の農繁期約1ヶ月間、4セトルメントで第1回東北農村子供生活指導所（農繁期託児所）を開設した。それまでも母親と共にセトルメントに通う子供たちのために行ってきた託児であったが、農繁期の地元の必要に応じて対象を広げることになった。前年のもと子の視察において、農繁期託児所の必要性は特に認識された点でもあった。この時期は、東京目白で開催された「幼児生活展覧会」（これをもとに自由学園幼児生活団が発足）が、全国各地に巡回を始めた頃であった。都市部を主たる対象として研究された新しい「子ども自身の生活」に着目した幼児教育の内容は、この展覧会を主導した羽仁説子の視点によって農繁期託児所でも早速に取り入れられ広がっていった。以後1938秋、1939春、1939秋、1940春、1940秋、1941年春、1941年春、1941年秋、1942年春と9回にわたって行われた。

1941年春以降の託児所では、女子部生徒が初めて卒業生と共に本格的に働くことになった。出発に先立って羽仁説子が女子部高等科3年生、卒業生と協議を重ね、生活指導と衛生保健の視点のみならず、自然の観察という理科や、擬音楽器などを用いた音楽教育をふくんだ指導方針を示して送り出した。説子は開催中藤尾と鎌田を訪問して、一人ひとりの子どもに目を注ぎ、母親たちからも親しく話を聞き、子どもたち、母親たち、指導者たち皆に話しかけたことは、印象深く皆の心に残った。説子が、託児所は無事に子どもを預かるだけではない、教育の場であるとの立場に立っていたからであった<sup>64</sup>。

#### 2-2-8. 全国からの支援 経費

東北セトルメントのための資金は、開始以来、主として各地友の会と婦人之友読者からの醸金と物品寄付によっていた。1937年8月には、前月の日中戦争（当時は日支事変と呼ばれた）勃発を受けて出征兵士家族のための「われらの奉公運動 1日1銭醸金」<sup>65</sup>が始められた。翌年5月には「北京生活学校」が始まりそのための寄付も加わり、同年7月には、婦人之友社に奉仕部が新設されてそれらすべての実務を担当することになり、寄付はそこに集約され必要に応じて分配されることになった。

以降、毎月の『婦人之友』に寄付と経費が詳細に報告された。宮内省、恩賜財団慶福会、厚生省、軍人援護会等や、各県・村からの助成金もここに加えられている。また、1935年36年には自由学園卒業生が出演する音楽会、38年と39年には自由学園の生徒による音楽一斉教授の音楽教育発表演奏会などこれら運動への寄付をうたった催し物が開かれて、収益が奉仕部に寄付されている。

### 2-2-9. 戦時下の働き 農村勤労奉仕隊の枠組みで

1942年秋の農繁期に、女子部生徒は帝国農会の委託を受け、大日本青少年団都市青年農村勤労奉仕隊として、千葉、群馬県下で託児所と共同炊事の勤労奉仕を始めた。その後1944年春まで、茨城、栃木県下を加えた4県でこの働きは続いた。同時に、東北セトルメントを拠点とした前記農繁期託児所も続けられた。

当初は高等科3年があっていたが、1943年秋からは高等科2年が、1944年春には高等科1年が加わった。託児所の奉仕にはこれまでの経験が生かされた。共同炊事は、もと子が「万人のたべものきものを平等（ひとつ）にする運動<sup>66</sup>」で提唱しそれまでに各地での実践もあったが、3食を多くの家族に提供することは初めてで、生徒たちは夢中でその仕事にあたったという<sup>67</sup>。

## 3. 戦後の農村文化運動

### 3-1. 新時代に活動再開へ

#### 3-1-1. 友の会再開 生活講習会

戦後、友の会が全国的な活動を再開したのは1946年5月であった。全国友の会大会が南沢で4年ぶりに開かれ、東北セトルメントの講習生で構成される農村友の会の代表が、初めて大会に参加した。

前年の秋にはいち早く目白において婦人之友社主催の美術工芸講座と洋裁基礎講座が始められ<sup>68</sup>、翌年6月中旬には、週3日約2ヶ月間の「若い人々のための講習 衣食住の学校」を目白明日館で開始していた。講師は、衣食住家計に優れた友の会の会員と自由学園の教師・卒業生・関係者などで、女子部新卒業生が助手として働いた。この講習会は1948年4月開校の「自由学園生活学校」に続いていく。

続いて46年8月全国友の会は、友の会会員を対象に衣・食・家計・時間の使い方をテーマに「衣食住学校指導者養成会」を開催、夏休み中の女子部清風寮で5日間合宿して、各地での衣食住学校の準備を始めた<sup>69</sup>。全国で農閑期衣食住学校が始まるのは翌々年2月であった。戦前の卒業生主体であったのとは変わり、女子部最高学年の生徒が各地の友の会会員共に働くことになる。

#### 3-1-2. 自由学園の取組み 那須農場を中心に

戦後、農村は食糧増産が喫緊の課題であり、同時に農地解放に象徴される農村民主化政策によって大きな変化の中にあった。1948年には農業改良助長法が制定され、科学的な農業と、農家の生活の改善が目指された時代であった。

戦後、農村への働きは、友の会との共働より先、1947年2月、自由学園が先行して、女子部高等科3年生農村グループ（卒業勉強の1グループ）によって自由学園那須農場（1941年、男子部卒業生と男子部生徒によって栃木県東那須野村に開場された。この当時は男子部卒業生が責任者となって食糧増産に励み、男子部生徒が農業体験をする場となり、また近隣の助力も得ていて、地元との交流が行われていた。）を拠点とした衣食住学校をもって始められた。那須農場近郊のほか福島県鎌田村、兵庫県志染村の3カ所で開催、これが、それまでは卒業生が活動の主体であったのと代わって、女子部生徒（主として最高学年）が農閑期衣食住学校、農繁期託児所と27年間にわたって続けた活動の始まりとなった。

羽仁吉一は「農村の文化工作は、生活の合理化から出発すべきである。（中略）学園那須農場が今や漸く農場をとりまく農村の文化のためにも、進んで幾分の力をささげる機会が来たように思う<sup>70</sup>。」とこの活動の意義を書いている。

那須では、農場に働きにきたことのある若い女性を優先し、合理的な農村衣食住のあり方を講習した。友の会中央委員であり女子部の家事の教師でもある堀江いちが指導者の中心となり、女子部生徒が助手として共に働いた。那須農場ではこれ以降、衣食住学校7年間、託児所は17年間続けられた。

この前年2月、男子部5回生が卒業記念の「協同研究・日本農業の現状と将来の発展」で、東北・関東・信越・東海・中国・九州の農村百数十カ所の実状を調査した記録を作成、また卒業式（1946年4月28日）での協同研究報告において、将来における自由学園総合大学の基盤として農業研究所の設立を発表した。ここには、当時の農村への関心を見ることが出来る。この研究は、以後男子学部で続く農村調査の嚆矢ともなった。

### 3-2. 農村文化を高めるために 農村文化運動 各地友の会と共に

#### 3-2-1. 農閑期衣食住学校 全国展開へ

翌1948年8月、那須農場に羽仁夫妻と友の会中央委員38人が集り、農村への働きかけについて各地の現状と希望が話し合われた。さっぱりした手作りの服装で集まった前年の衣食住学校の講習修了生が用意したお茶の会には、農場員（男子部卒業生）、農学塾生<sup>71</sup>が集った。この相談で「よい生活を村々に」をテーマに全国に友の会農村生活セトルメントをとの気運が高まった。女子部最高学年の生徒を全国におくってこの仕事を助けようとの羽仁夫妻の申し出に、一同拍手して勇躍したという<sup>72</sup>。こうして翌1949年2月には、全国友の会主催の「農閑期衣食住学校」が北海道岩見沢から九州島原まで全国33か所で実現した。1946年度女子部卒業勉強「農村に正しい文化を創る運動<sup>73</sup>」で示された提案「衣・さっぱりした働きやすい服装」「食と栄養」「住・毎日の掃除と丁寧掃除」を基準として内容が準備され、講師は開催地の友の会会員と女子部高等科3年生とが協力して行った。終講式で講習生が、尊い体験や生まれた友情の喜びを報告するのを聞いた受け入れ先の公民館長の「とても二週間の講習とは思われぬ程、深みのあるあたたかい愛にとけきった光景」と感想を語っている<sup>74</sup>。

初めて各地に卒業間際の生徒を送り出したもと子は、帰ってきた生徒たちの報告を感謝しつつ聞き「この仕事を年々よいものに育ててゆくことは、友の会の意義ある教育的社会事業であると同時に、新しい自由学園大学のよき勉強、生きた学課のひとつになる<sup>75</sup>。」と意義を記している。この当時、自由学園では大学部がまさに開学されようとしていた。もと子のこの言葉は女子の大学部のイメージを語っている。以後、「農閑期衣食住学校」と「農繁期託児所」は、女子部生徒の学びの場としても位置づけられ、戦前の活動の主体が女子部卒業生であったのとは異なる様相が見える。1949年33カ所（学園生徒派遣30カ所）、1950年23カ所（学園生徒派遣19カ所）、1951年22カ所（学園生徒派遣17カ所）、1952年28カ所（学園生徒派遣14カ所）、1953年19カ所（学園生徒派遣10カ所）と学園生徒の派遣は5年間続けられた。

閉校式での受講生の言葉や竹まいに「衣食住学校が洋裁学校や料理学校ではなく、衣食住の技術の上にある人格の成長を願う学校であることが実証されてあまりあるものがあつた<sup>76</sup>」との参列者の感想が記されてように、互いに有意義な活動であったが、戦後の社会変化は大きく、時代と共に応募者が減り、自由学園からの参加は1953年2月で終了した。

その後も、主婦や若い女性を対象にした講習会は、各地友の会の状況に応じて内容、期間などが設定され、友の会の活動として続けられている。

#### 3-2-2. 農繁期託児所

一方、農繁期託児所の働きは、1944年春以降中断されていたが、農村の公立保育所の設置が不十分な状況に注目して、学園生徒の衣食住学校派遣終了の翌1954年、友の会大会でのもと子の提案もあって、6月早速、学園生徒は農繁期託児所で働くことになった<sup>77</sup>。友の会中央部と地元友の会の努力、地元の協力があって、学園生にとっては、幼い生命にふれる得難い学びの時となった。

初めての54年は東北と長野の6カ所で行われた。以後、55年6カ所、56年6カ所、57年6カ所、58年6カ所、59年8カ所、60年3カ所、61年7カ所、62年10カ所、63年11カ所、64年11カ所、65年10カ所、66年9カ所、67年13カ所、68年14カ所、69年14カ所、70年14カ所、71年12カ所、72年8カ所、73年4カ所と19年間に亘った。述べ開催は178回となり、那須農場周辺99回、東北セトルメントの歴史のある秋田県生保内・田沢湖周辺48回、その他東北18回、長野県13回であった。

この活動は、女子学部1年の幼児生活団での実習を活かして、女子学部2年のカリキュラムに組み込まれた。昼食・おやつ、生活講習、紙芝居、ギニョール、美術、体操と音楽、来た印（出席表）、名札、家庭との連絡帳など、手作りするもの、まとめて買うものなどの準備をして各地に出向き、2週間程度開催した。徐々に幼い2・3歳児が増える傾向があり、地元の子育ての経験のある友の会会員の力を借りることもあった<sup>78</sup>。

開催場所が62年から10箇所を越え71年までそれが続くが、その後、急激に開催場所が減少して1973年をもってこの活動は終了している。この間の事情は不明だが、この頃、農協立幼稚園や農協婦人部による季節保育園の設立によって、農村の保育制度が改善されたことが影響しているのではないと思われる<sup>79</sup>。

### 3-2-3. 活動を支えた経費

以上の活動の資金は、地元役場からの援助、参加者からの食費集金なども報告されているが<sup>80</sup>、主として全国友の会を中心とした醸金によるものであった。

1949年、全国の農村のために衣食住学校を始めた時、この事業を継続するために1口月5円で何口でも参加出来る「農村文化運動醸金」の開設を「全国友の会大会」で決定し、友の会員、婦人之友読者に寄付を呼びかけた。終戦の間近まで続いた「一日一銭醸金」の精神を引き継いだものであった<sup>81</sup>。1955年、教育の仕事こそすべての根本であると、農村のためだけでなく、すべての子どもの教育のために、また、自由学園にも協力したいと「教育醸金」と名を変えた。1964年には教育への目的を一層充実させると共に、災害支援や社会福祉のためにも貢献するために「われらの公共費」<sup>82</sup>と名称を変更している。

近年の災害支援では、「われらの公共費」に自由学園、婦人之友読者の寄付も集約されるシステムが効率的に運営されている。

## 4. 「わが住む村」久留米村との交流再び 女子部学生の勉強として

### 4-1. 「村の家」の提案

那須農場ほかでの衣食住学校開催の翌年1948年春、女子部高等科3年生（女子部26回生）は卒業勉強で、「衣食住学校」（全国で行われた前記「衣食住学校」より1年早い）、愛育会の広瀬興指導による「乳幼児健康相談所」（久留米村中学校の講堂にて）、「農村幼児生活団」（久留米村村内の浄牧院、多聞寺で）を行って地元との交流を再開した。

その中で特に乳幼児のために定期的な検診の必要性に着目し、村役場とも相談しながら様々な機能を備えた「村の家」を提案し、遠藤新指導による設計を行い発表しているが建設は実現しなかった<sup>83</sup>。

活動は後輩に引き継がれ、衣食住学校はこの年から1953年まで6年開催、1954年から58年と1965年から69年のいずれも10月には農繁期託児所も行っている。

1953年3月卒業の男子最高学部第1回生が卒業研究で、久留米村と新潟と富山（自由学園農学塾卒業生の地元）の農村調査を関島久雄指導により行っている<sup>84</sup>のも、この時期の農村への関心を覗うことが出来る。1958年3月卒業の6回生は、東北セトルメントで縁のある田山村の農村調査を行っている。

### 4-2. 通年の子供会

1954年より女子学部2年幼児グループによる週1回通年の子供会が、村内の大円寺、多門寺、神明社の境内で始められた。同年春に、女子学部2年生（女子部32回生）が卒業勉強のテーマの一つとして、村内の「教育に関する実態調査」（サンプル数約300）を行い<sup>85</sup>、久留米村の中に幼児教育の施設が必要であることを提案した<sup>86</sup>ことが契機となった。

1954年から58年と1965年から69年のいずれも10月には農繁期託児所も行っている。

1955年4月26日の「幼児生活団入学式」（この時期には幼児生活団の名称が用いられた）にはもと子が参列して31人の子どもたちに、自身の日課の散歩の途中に出会ったら「大きい声で先生とって頂戴」と親しく呼びかけたこともあった<sup>87</sup>。

この後、小山生活改善センターが主な開催場所となりこの活動は1985年度まで続けられた。学部1年のカリキュラムで全員が学園生活団の実習を経験し、そのうち数人が学部2年では幼児グループに属して、生活団で学びつつ子供会を開いた。一番人数の多かった1967年度には119人の子供が集まったが、1971年度からは4歳児に限定し、人数を30人前後とした。1985年度には、会場・小山生活改善センター会場の安全面が懸念されるようになり、この活動を終えた。

最近行われた1950年代の子供会の子どもたち5人のインタビューでは、子供会に行くのが楽しみだったこと、寝る前に明日の洋服を揃えると教わったことを今も続けていること、学園の体操会を見学してびっくりしたことなどが、懐かしく語られている<sup>88</sup>。

この間に久留米村は、1956年久留米町に、1970年東久留米市にと環境は大きく変化した。

#### 4.3. 地元との交流 その後

1997年に「東久留米に町を拓いて70年 自由学園の歴史と写真展」を東久留米市市民プラザホールで開催した。これを機に、子供会を終了してから12年の中断をこえて、河川調査、自然環境調査、コミュニティ活動、農産品加工企画、学校公開、しのもめ茶寮オープンによる地域交流、防災協力など市との交流が、学生・生徒の学びの場としての意味もふくめてさまざまな分野で盛んに行われるようになった。これらについては菅原然子著「自由学園の東久留米市との協働 1990年代以降を中心に」(『生活大学研究』vol. 6)に詳しい。

今でも、「羽仁のおばあちゃん」ともと子の村内の散歩姿を懐かしみ、「衣食住学校」「子供会」農産物を通じての交流などを記憶する方々との縁が続いて、地元との交流が新たな分野で展開を見せている。

#### 5. おわりに

『婦人之友』第2巻第3号(1909年明治42年3月発行)に、もと子が長女説子のために鎌倉に転地していた時のものと思われる「農家の娘」という一文がある。田園に移り住んで身近に接するようになった農家の女性たちの生活への同情が見える文章である。野良に働く一人の娘と親しく話して、その労苦と、その立場に不満も感じない無欲さに同情し、「私共は私共の生存のために一日も欠くべからざる必需の品を最も安価に供給してくれる質朴なる田園の人に感謝し、(中略)めいめいに深く自ずからの責任を知らねばならぬと思います。」と述べている。もと子はその初心そのままに、仲間と共に、昭和恐慌、東北大凶作と農村の窮状が伝えられる時に、そこに住む一人ひとりの自立をとの願いをこめて運動を主導した。その農村への働きの底には、女性の自立を願うもと子の思いが常に流れていたと思う。

農村への生活合理化運動は、戦後の農地改革、教育の機会均等、公的保育施設の充実、農作業機械化等によって農村の状態が徐々に改善したことによって、1986年には直接的な活動を終えることになった。私たち一人ひとりの生活合理化運動は、自由学園、婦人之友、全国友の会にとって、これからも重要なテーマであり続けている。

#### 注

- 1 村上民「自由学園草創期におけるキリスト教と『自由』問題(2)羽仁もと子、吉一の出版事業とキリスト教との関わり」(『生活大学研究』vol. 5 (2020)、44頁)
- 2 「本社の運動場開き 『新少女』及び『子供之友』大運動会」『婦人之友』1916年7月号19-29頁。
- 3 「本社の大運動会」『婦人之友』1917年7月号10-12頁。
- 4 「羽仁もと子「自他の才能の提供と利用 全国到るところに『主婦の会』の設立を提議す」『婦人之友』1919年1月号2-10頁。
- 5 羽仁もと子「女学校同窓連合会に就て」『婦人之友』1919年5月号50-53頁。
- 6 羽仁もと子 松岡久子「婦人之友読者組合組織の提議」『婦人之友』1923年1月2-15頁。
- 7 羽仁もと子「全国『友の会』へ」『婦人之友』1927年11月2-4頁。
- 8 「全国友の会小史 40周年記念」3頁1970年。
- 9 羽仁吉一が『婦人之友』に連載した「雑司ヶ谷短信」は初回1932年10月号のみ「目白短信」として掲載された。
- 10 杉山元治郎「農村費人の現状とその行くべき道 栄養不良と多産と休養不足に悩む農村婦人の生活 人口の半ばを占むる農村婦人のために働く婦人はなきか」『婦人之友』1927年2月号31-34頁。
- 11 女子部7回生「南沢の露払い 卒業60年記念」資料室資料。
- 12 佐藤宣子『白梅』自費出版 1980年。
- 13 女子部7回生「高等科2年の頃のこと」『自由学園の歴史1』資料。
- 14 「第7回自由学園美術工芸展覧会予告」『婦人之友』1929年12月号29頁。
- 15 実際に始まったのは3月24日。
- 16 「学園セトルメントニュース」『婦人之友』1930年5月号218-221頁。
- 17 羽仁もと子「友への手紙 引越そばの話」『婦人之友』1930年5月号17-20頁。
- 18 「学園セトルメントニュース」『婦人之友』1930年5月号6月号211-212頁。
- 19 託児所は戦時下の中断はあるものの戦後子ども会と名を変え、1986年まで続けて交流の場となった。
- 20 「学園セトルメントニュース」『婦人之友』1930年8月号215頁/羽仁もと子「発言」「小よりより大への座談会」『婦人之友』1930年9月号42-43頁。

## 農村セトルメント運動の展開

- 21 「農村のニュース 春の即売会」『婦人之友』1931年5月号229頁。
- 22 1930年4月目白から移転していた。
- 23 「自由学園小学校学校日誌」1930年5月31日（非公開資料）。
- 24 「自由学園農村セトルメント1932」資料室資料。
- 25 「学園新聞」28号1932年11月1日発行2頁／『友の会レポート』13号1932年11月2日発行7頁。
- 26 フランス・ニースに於ける世界新教育会議に参加。
- 27 小林唯四郎医師一家が南沢に移住したのを聞きつけて、村人が診療を受けに小林宅に集まったことがきっかけになって、増築の前年7月1日、学園町の山本多喜宅で診療所がすでに始められていた。
- 28 「農村の健康を護れ 南沢農村診療所を見る」『婦人之友』1935年12月号265-267頁。
- 29 大槻千恵子「南沢診療所と学園事務の仕事に就いて」『卒業50年の歩みから』46頁。
- 30 「第9章久留米の学校と文化第1節自由学園」『東久留米市史』687-689頁／「自由学園」『東久留米の近代史』124-125頁。
- 31 同前「南沢診療所と学園事務の仕事に就いて」46頁／羽仁もと子「万人のたべものきものを平等（ひとつ）にする運動」『婦人之友』1933年9月号33-38頁。
- 32 村上民「東久留米と自由学園90年 報告用原稿」『自由学園100年史事業活動報告書』2014年度。
- 33 羽仁吉一「我が住む村 雑司ヶ谷短信」『婦人之友』1948年5月号6頁。
- 34 『羽仁もと子著作集』第1回配本は1927年8月。
- 35 羽仁もと子「卒業生と社会運動 それ自身一つの社会として生き成長しそうして働きかけつつある学校 仏国ニースにおける第6回世界新教育会議講演」『婦人之友』1932年10月号33-47頁。
- 36 桐淵とよ「平和への道の基礎となる生活を」全国友の会中央部『創立者誕生百年記念 ともに目ざすこの慕わしい道』86頁。
- 37 羽仁もと子「友への手紙 生活合理化」『婦人之友』1931年12月号25-42頁。
- 38 「家庭生活合理化展覧会開く」『自由学園の歴史 1』268頁。
- 39 「我等は如何なる隣人を持っているか」「南沢における自由学園農村セトルメントの歴史」「真の自覚と希望に輝く農村へ 我等の小さい力をささげよう」『婦人之友』1932年1月号80-87頁。
- 40 羽仁説子「隣人愛こそ最上の合理化 農村セトルメントについて」『婦人之友』1932年1月号130-138頁。
- 41 「われらの研究生生活報告記12 東北凶作地一寒村に住む」『婦人之友』1934年12月号94-109頁。
- 42 羽仁もと子「万人のたべものきものを平等（ひとつ）にする運動」『婦人之友』1933年9月号33-38頁。
- 43 羽仁もと子「舞台と楽屋」『婦人之友』1931年10月号25-26頁。
- 44 『人間形成と社会 II 第5巻 都市の住民の地域作り』に復刻収録 クレス出版 2012年。
- 45 「ミセス羽仁から全国友の会へ提案 凶作地を通してする我等の奉仕」『友の会レポート』38号1935年1月2日発行1-2頁。
- 46 「うてばひびく」『羽仁もと子著作集 子供読本』「いろはかるた」のタイトル。
- 47 「東北農村を語る」『婦人之友』1935年3月号112-123頁。
- 48 「座談会凶作の東北を思ふ」『学園新聞』71号1935年2月15日発行11-12頁。
- 49 「東北セトルメント 指導者を募集します」『友の会レポート』41号1935年4月15日発行8頁。
- 50 落合うの「各地友の会分担の洋服製作を打切る」『友の新聞』17号1936年12月2日発行1頁。
- 51 「東北セトルメント視察団の計画ミセス羽仁も同行、大会出席者の中より有志を募って」『婦人之友』1937年6月号269頁／「ミセス羽仁東北セトルメントへ」『婦人之友』1937年7月号グラビア／「座談会農村の更生について生保内村にてミセス羽仁土地の有力者と語る」『婦人之友』1937年7月号50-58頁／「ミセス羽仁とともに東北セトルメント視察の旅」『婦人之友』1937年7月号258-263頁。
- 52 「山形県候補地決定す」『友の会レポート』41号1939年1月25日発行4頁／「山形県大蔵セトルメントより村中に洋服熱が高まる」『友の会レポート』42号1939年3月15日発行6頁／「六つのセトルメントを訪ねる 大蔵セトルメント」『友の会レポート』42号1939年3月15日発行7頁。
- 53 「田山村セトルメント廃止」『友の新聞』28号1937年11月20日発行2頁。
- 54 落合うの「東北農村五年間の歩み」『友のたより』54号1940年5月15日発行3頁。
- 55 落合うの「東北農村合理化運動 回顧展望感謝」『友の新聞』40号1938年12月25日発行2頁／「東北千人家族の晴着2」『婦人之友』1939年4月号144頁。
- 56 「東北農村生活合理化運動 5ヶ年間の収支決算」『婦人之友』1939年5月号92頁。
- 57 「友の会農村女子生活講習所案内」『友の新聞』43号1939年4月25日発行5頁。
- 58 落合うの「東北運動の新計画」『友の新聞』46号1939年8月25日発行4頁。
- 59 「自分たちの力で出来た夏の子供会」『友の新聞』47号1939年9月25日発行4頁。

- 60 この時期の記事には「南沢友の会」「南沢友の家」との記述が見られる。南沢友の会は南沢最寄と考えられ、南沢友の家については1937年診療所に隣接して建てられた「休養所」と考えられる。「南沢に理想的な休養室」『学園新聞』102号1937年10月15日発行4頁。
- 61 落合うの「小湊より南沢へ 東北講習生のよろこび」『友の新聞』48号1939年10月25日4頁／落合うの「南沢にいそしみ励む東北の講習生」『友の新聞』50号1939年12月25日発行1頁。
- 62 春休み中の女子部生徒が参加して、音楽と美術も加わる「東北農村友の会の外への働き」『友の新聞』65号1941年5月25日発行4頁。
- 63 「農村住宅改善のための資料 能率から見た『農村主婦の生活』調査」『婦人之友』1939年6月112-129頁。
- 64 羽仁説子「東北の子供たちを訪ねて」『婦人之友』1941年7月号62-69頁／羽仁説子「東北の子供たちを訪ねて 2」『婦人之友』1941年8月号106-109頁。
- 65 「われらの奉公運動1日1銭醜金の緊急提案」『婦人之友』1937年9月号52-55頁／「われらの奉公運動」『友の新聞』25号1937年8月25日発行1頁。
- 66 『婦人之友』1933年9月号33-38頁。
- 67 「戦時下における自由学園の教育(2)戦時下『生活即教育』の諸相」(vol. 6)の3.4.2「1942～1943年度 学外への勤労働員始まる自由学園の存続問題を並行して」にも記述あり
- 68 「本社主催 生活講習会再開」『婦人之友』1945年10月号13頁。
- 69 「衣食住学校指導者養成研究会開かる」『友の新聞』再刊第2号1946年10月25日発行2頁。
- 70 「雑司ヶ谷短信 農場近事 羽仁吉一」『婦人之友』1947年1・2月合併号48頁。
- 71 自由学園農学塾1947年～1973年。
- 72 「全国に友の会農村生活セットルメントを作りたい」『友の新聞』再刊第9号1948年9月30日発行3頁。
- 73 「よき社会をつくるために 自由学園女子部卒業勉強 農村に正しい文化を創造る運動」『婦人之友』1947年5・6月合併号37-54頁。
- 74 「何がこの『不思議な空気』を作り出したか」『婦人之友』1949年4月号26-28頁。
- 75 羽仁もと子「真実明白自主自由」『婦人之友』1949年3月号13-15頁。
- 76 「農閑期衣食住学校」[那須の生徒の感想]「学園新聞」復刊4号1951年3月25日発行2頁。
- 77 「農繁期託児所の開設」『友の新聞』51号1954年6月5日発行3頁。
- 78 「自由学園女子学部生によって 今年も農繁期託児所を われらの公共費を使って」『友の新聞』242号1971年7月20日発行2-3頁。
- 79 「福田いづみ研究報告 農協における乳幼児支援の現状と課題」『共催総合研究』66号。
- 80 「われらの公共費を使って今年度農村への働きかけ 学園女子学部の勉強として」『友の新聞』第178号1965年7月20日発行2頁。
- 81 桐淵とよ「農村への働き」『友の新聞』再刊第13号1949年6月20日2頁。
- 82 「われらの公共費を考える」『友の新聞』222号1969年7月21日発行3頁。
- 83 「自由学園女子部卒業勉強『わが住む村』より」『婦人之友』1948年6月号20-30頁。
- 84 羽仁吉一「頭と腕と汗 雑司ヶ谷短信」『婦人之友』1952年9月号126頁
- 85 指導者関島久雄「経済」。
- 86 女子部32回生「久留米村の教育について 卒業勉強」1954年3月。／「卒業勉強概略」『学園新聞』35号1934年4月15日。
- 87 羽仁もと子「光にあゆむ」『婦人之友』1950年6月号14-17頁。
- 88 「地域社会における自由学園のあり方と展望 農村生活団・子供会の歴史的変遷に学ぶ 久崎彩加 2015年度卒業勉強」資料室資料。

「100年史関連論考」は、自由学園100年史(デジタルアーカイブ)編纂の基礎調査の成果を直接間接に下敷きとし、その調査過程で生じた論点を、著者の視点で深めた試論です。100年史編纂委員会による確認を経ますが、各論考の内容責任は著者にあります。なお、論文で使用している資料は、原則として自由学園資料室の公開基準内のものですが、一部、現在整理中の未公開資料を使用している場合があります。詳細については自由学園資料室(042-422-1097)へお問い合わせください。